あやかしちえんじ！

魔法少女は今日も魔法が使えない

1

栗栖ティナ

Illustration ちり

OVERLAP

プロローグ▼ようこそあやかしの街へ

「準備はいい、輝姫？」
「オッケーだよん。早速始めちゃおうよ、リンリン」
——深夜。住宅街と駅前の繁華街を隔てている大きな公園の片隅に、場違いな可愛らしい女の子達の姿があった。
「ねねっ、早く変身してよ、変身っ！」
ニッコリ微笑む、モデルみたいに背が高いポニーテールの女の子。
人懐っこい笑みを浮かべて手拍子をするのに合わせて、頭の上にあるモフモフとした犬か猫みたいな三角形の耳が小さく揺れる。
「わかってるから急かさないでよ。見世物じゃないんだから。……いくわよ！」
そんな犬耳少女と向き合うブレザータイプの制服姿の女の子が、不満げに頬をふくらませながら手を後ろに回し——細長い棒のようなものを取り出した。
ピンクを基調としてハートやら星で飾られた可愛らしいそれは、魔法少女とか変身ヒロインがよく持っているロッド——定番の変身アイテムのようなもの。
白いリボンでくくられた長いツインテールを揺らしながらクルッと一回転すると、少女は

それを星空に向けて高々と掲げた。
「ライト・コーリング！……ミラクル、マジカル、メタモルフュージョン!!」
右膝を直角に近いくらい曲げて足を上げながら、先端を飾るハートの形を空に描くようにロッドを振る。
するとその声に反応したようにロッドの先端のハートが眩い光を放ち始めた。
少女が身に纏う制服やスカートが光に塗り潰され、細かな粒子となって弾け消える。
産まれたままの姿となった身体に帯状となった光が巻きついていく。
そしてポンッと何かが弾けるような音と共に、ツインテールの根元をくくっていた白紐が星形の飾りをつけたピンクと白のストライプリボンに変化した。
同時に彼女を包み込んでいた光が襟元に現れた水色の宝石に吸い込まれ——。
「お待たせ！　さあ、あたしの光で浄化してあげるっ」
——そこに一人の魔法少女が現れた。

（な、何だよ……今の！）
木陰に身を隠したまま、俺——神喰琉聖は、目の当たりにした信じがたい光景に悲鳴を上げそうになるのをすんでのところで堪えていた。
コンビニに向かう途中、どこからか聞こえてきた『変身』という単語。
日曜日の朝、立て続けに放送される特撮やらアニメを毎週欠かさず見ている俺にとっては

聞き逃せない魅力的な単語に惹かれて好奇心を抑えられなかったのだ。
（夢とか幻……じゃないよな）
目を擦っても、手にしたロッドをビシッと前に突き出す魔法少女の姿は消えない。
コルセットのようにボディラインを浮かび上がらせる、肩出しのワンピース。胸の真ん中がハート形にくり抜かれていて深い谷間も丸見えだ。
お碗みたいに形が美しく整っているそこは、制服姿のときより大きく見える。
これも変身の効果か、それとも元々着やせするタイプなのかもしれない。
二の腕まで包む白い長手袋やふわりとした同じ色のスカートは、赤や桃色のリボンで華やかに飾られている。地味な黒いハイニーソックスも髪を飾るリボンと同じ赤とピンクのストライプ柄に変わり、靴もそれに合わせてピンクになっていた。
髪型、アイテム、服、ついでに台詞のセンス。
どれをとっても王道ど真ん中な魔法少女、そうとしか言えない。
「あははっ、模擬戦で浄化されるのは勘弁して欲しいかな～」
対峙している背の高い女の子も現実離れした格好だ。
Tシャツの裾をヘソまで見えてしまいそうなくらいずり上げてしまっている巨大な双球も驚きだけど、それよりも頭の三角耳は何だ？
いくら滅多に人が通らないこの時間とはいえ、あんな獣耳のヘアバンドをつけて出歩くなんてさすがに恥ずかしいだろう。

……いや、可愛いのは可愛いけどさ。
（とりあえず、もういくか）
こんな覗きまがいの真似をいつまでも続けるのもどうかと思うし、嫌な予感もする。
立ち去ろうとした――そのとき。
「何よ～、まず形から入るといいって台詞を考えたのは輝姫じゃないっ！　もう、いいから早く始めましょう。遅くなる前に……」
「わかってるって。全力でガブガブしちゃうよ～」
「お願い。あたしをギリギリまで追い込んで……目覚めさせて！」
和やかに声をかけあった二人が――ほとんど同時に駆け出す。
ビュンッ。そんな風を切る音が聞こえてきそうな、明らかに人間離れした加速。
「いくよ、これがあたしのフルスロットルっ！」
足元の芝生が抉れるほどの力強さで飛び上がった魔法少女がロッドを掲げ――。
それをただ無造作に、全力で振り下ろした。
「おっと……！」
ニィッと八重歯を覗かせて楽しげに笑う犬耳少女が、頭上で両手首を×形に組んでその一撃を受け止める。
ガンッ！　まるで鉄でも打ったかのような音が辺りに響く。
「甘い甘い！　キキはパワーじゃ負けないよ～」

「わかってるわよ、それくらいっ！」
怒鳴りながら、魔法少女はクルッと宙返りをして着地を決める。
スカートがふわりと捲れ、そのほっそりとしたふとももが付け根辺りまで見えかけたけど隠そうともせず、息つく間もなくロッドを振り下ろす。
キラッと輝いたかと思うと、硬い物を打つような大きな音が辺りに響く。
とても目で追えない、常識外れの速い打ち込みだ。
「ん～っ、そろそろこっちからいくよーっ！」
その猛攻を顔色一つ変えず受け止めていた犬耳少女が、大きく後ろに飛び退く。
前のめりに両手を突いて着地し、そのまま本物の犬みたいに素早く駆け出す。
「がおーっ！」
犬耳少女は可愛らしい雄叫びとは裏腹の凄まじい勢いで飛びかかる。
「きなさい、輝姫！」
ロッドを大上段に構えた魔法少女は、一歩も引かずにそれを振り下ろす。
ガキーンッ。一際大きな衝撃音と共に二人は派手に後ろへ吹き飛ばされるが、まるで息を合わせたかのようにクルクルと連続バク宙を決め、平然と着地を決めた。
なんていうか……完全にバトル漫画の世界だ。
剣と拳がぶつかり、汗が散る――そんな感じに近い。
（と言うか、魔法少女が魔法使わずに物理攻撃って……）

さっきからロッドを剣みたいに振り回しているだけだ。
普通は魔法で戦うものだろう。それもこう、星やハートで飾られた光を放ったり、綺麗な虹が出たり、そういういかにも可愛らしいので。
これじゃあ魔法少女じゃなくて女戦士だ。
呆然とそんな突っ込みを入れた直後、それどころではないと頭を抱える。
嫌な予感がしたとおりだ。こいつら……普通じゃない。
さっさと逃げようと木陰から一歩踏み出したとき。
「きゃあああっ」
「うおっ!?」
勢いよく飛んできたピンク色のふわふわな物体と衝突し、大の字に倒れてしまう。
何が起こったのかわからないまま、とりあえず起き上がろうとする……が。
「むごっ！　むっ、な……なんだ、これ」
むにぃっと、なんだかとても温かいものに顔が押し潰され、身動きが取れない。
息を吸うとミントみたいに爽やかな香りが肺いっぱいに広った。
目の前に見えるのは滑らかな曲線を描く対のふくらみ。クリーム色の衣装の真ん中に開いたハート形の穴から白肌が覗き見えている。
魔法少女の衣装……だよな、これ。
両手が無意識に動き、頬を優しく圧迫してくる隆起を摑んでしまう。

ムニュムニュ。搗きたてのお餅みたいなずっと揉んでいたくなる心地よい弾力だ。
夢見心地な気分っていうのは、今みたいなことを言うんだろうな。
「ひゃうっ、う、動くな……んぅっ！」
聞こえてきた可愛らしい悲鳴で、俺はやっと我に返った。
もしかして……いや、もしかしなくてもこれって……。
「さ、触るな、バカーっ！　変態、変態、へんたぁぁぁぁぁぁいっ!!」
「うわあっ!?」
ヒステリックな怒声と共に覆い被さる重みが立ち上がり、やっと解放された。
慌てて手を放し、這いずるようにして悲鳴の主から逃れる。
「も、揉んだ！　今、あ、あたしの……うぅっ」
自らを両手で抱き締め、俺を睨みつけるツインテールの女の子。
まだ手の平に余韻が残ってる……って、お、俺、今、なにやった!?
「大丈夫～、リンリン？　ちょっと本気で蹴りすぎたかなぁ」
呆然と向かい合う俺と女の子の緊張をとくように、頭の後ろで腕を組んで呑気な足取りで歩いてくる、犬耳少女。
どうやら彼女に蹴飛ばされた魔法少女と正面衝突してしまったらしい。
実に美味し……いや、間が悪く、不幸な事故だった。
「だ、大丈夫じゃないわよ！　そ、そそ、それより!!」

魔法少女は不満を訴えたそうだ。
「うにゃ？　さっきからちょっと臭うとは思ってたけどお客さん居たんだね。クンクン……うん、いいねぇ～キミ。なんだか……凄く美味しそうな匂いだよ」
慌てふためきながら落ちたロッドを拾う魔法少女と、大げさに鼻を鳴らしつつ鋭い八重歯を覗かせて笑う犬耳少女。
モフモフの三角耳がそれに合わせてひょこひょこと大きく揺れる。
「えっ、そ、それ、どうして動いて……どういう仕掛けだよ」
「仕掛けなんてないよ？　ほら」
思わず疑問を呟くと、犬耳少女は俺の手を掴んで自分の耳へ導いていった。
見た目どおり毛が柔らかくてヌイグルミみたいな感触だ。
……気持ちいいな、これ。
ちょっと癖になってきて指先で全体を少し強く摘んだり、撫でたりしてみる。
「ひゃんっ、あぁ……そ、そこ……敏感だから、あまり乱暴に弄らないで」
「へっ……？」
犬耳少女は頬を少し赤く染めてビクビクと肩を震わせる。
それに合わせて摘んでいる耳の動きも大きくなってきた。
まさか――恐る恐る根元をまさぐるが、土台になるヘアバンドらしき感触がない。
と言うか……明らかに地肌から直に生えている。

「これ……ほ、本物？」
「そうだけど？　キキ自慢のお耳を作り物だと思ってたの？　心外だなぁ～」
「あんた、いつまで触ってるのよ！　や、やっぱり痴漢っ!?」
不服そうに唇を尖らせて言う犬耳少女。
そしていまだ真っ赤な顔で怒鳴りつけてくる魔法少女。
……間違いない。こいつら……に、人間じゃ……ない。
そう気づいた瞬間、頭から足先まで凍りつくような恐怖に襲われ――。
「で、でで、出た……出たぁぁぁっ！　うわあああああ!!」
バネ仕掛けの人形みたいな勢いで飛び起き、脇目もふらず一目散に逃げ出した。
「出たって……人をお化け扱いするなぁ！　逃がさないわよ、この痴漢男!!」
「そうだねぇ～。あんな美味しそうな匂い、放っておけないよ♪」
ヒステリックなものと、のんびり間延びしたもの。声のトーンは正反対だけど、二人が揃って追いかけてくるのが足音と気配で振り返らなくてもわかった。
「ひっ、ひぃぃぃぃっ！」
我ながら情けない声を漏らしつつ、ただひたすら明るい方へ向かって走る。
やっぱり変なことに首を突っ込むんじゃなかった。
この体質と運の悪さのせいで、今まで何度も痛い目に遭ったのに。
それにしても――。

（霊感体質って……魔法少女まで見えるものなのかよ!?）
幽霊とか妖怪とか悪魔、そんな非現実的なものが見えたり寄ってくる。
そんな霊感体質に、俺は物心ついた頃からずっと悩まされ続けてきた。
心霊スポットへいく度にそういったものと遭遇し、寝床で金縛りにあった回数にいたってはとても数え切れない。
学校では『お化け男』なんて不名誉なあだ名で恐れられ、この年まで恋人は愚かまともに友達も作れなかった。
（だから嫌だったんだ、こんなふざけた町に引っ越してくるのは！）
新年度に合わせた親父の転勤を、最初は心機一転のいい機会だと歓迎した。
けど、それも引っ越し先のことをネットで調べるまでのことだった。
この辺りは、その手の番組では必ずと言っていいくらい取り上げられるほど有名な国内有数の『出るところ』だったのだ。
悪霊、お化け、妖怪。あらゆる物の怪の目撃談は数知れず。最近も夜な夜な若い女性が正体不明の影に襲われて衰弱した状態で発見されるという、とても人間の仕業とは思えない通り魔事件が続いているらしい。
俺みたいな霊感体質の人間にとって、まさに鬼門と言える場所。
絶対に来たくなかったけど独り立ちする甲斐性も居候する当てもない俺に他の選択肢はなく、泣く泣くやってきたのが今日のことだ。

初日からこれなんて……洒落にならないぞ。
（やっぱり、こんな時間にコンビニいこうなんて思うんじゃなかった）
嫌だって言ったのにお使いを押しつけてきたお袋……恨むぜ。
ああ、もう、この街から逃げるまでもう絶対に夜歩きしないぞ。
もっとも……このピンチを逃げ切らないと、その決意も無駄になる。
「逃げても無駄よ、諦めなさい!!」
「そうだぞ、待てぇ～！……って、リンリン、服がちょっとヤバげだよ？　胸のところがずれてきてる」
「えっ、ちょ、や、やだ！」
甲高い悲鳴と共に追いかけてくる足音が止まった。
振り返りたい――けど、そんな余裕はない。
化け物じみた戦いをしていた二人から逃げ切る、絶好のチャンスだ。
深夜の住宅街に、俺が地面を蹴る音だけが響く。
それを掻き消すように、突然降ってきた……音。
――バサバサ。
「ん？……うわぷっ！」
そんな羽ばたきの音と共に、俺の視界が黒で埋め尽くされる。
頭の芯に響く超音波みたいな鳴き声を上げて飛び交うそれは……蝙蝠。

手足の指の数でも足りないくらいの群れに取り囲まれていた。
ど、どこから湧いてきたんだ、こいつら!?
「こんなに月が美しい夜に……無粋な騒ぎね」
ちょっと舌足らずな甘い声に誘われ、慌てて空を見上げる。
どこか妖しい雰囲気を漂わせる上弦の月。それをバックに宙を舞うのは、夜空に溶け込むような黒いマントをはためかせる少女だった。
さらりと伸びた白銀の髪を濃い紫色のヘアバンドで飾り、赤い薔薇の花を腰や黒い長手袋にあしらったゴスロリ風のドレスに身を包んでいる。
普通ならちょっと派手すぎるように見える服装が、日本人離れした白い肌とフランス人形みたいに可愛らしい顔立ちにはこれ以上ないほどよく似合っていた。
背丈は俺より頭二つ分ほど低いし、身体つきもまだ未成熟。
それなのに視線が引きつけられて離せない、不思議な妖艶さを漂わせている。
思わず見とれてしまっていた俺だったが、風に靡くマントの下――腰の辺りで小さくパタパタと揺れている黒いものに気づいた。
一瞬、リボンかと思ったけれど形が違う。
それは俺を取り囲む蝙蝠達と同じような――羽根だ。
(ほ、本物……だよな、あれ。だって、動いてるし!)
造りものだと思いたいところだが、それなら空を飛べるはずがない。

額に滲む冷たい汗を拭うこともできず固まっていると、蝙蝠少女はあくまで優雅にゆったりと俺の目前に舞い降りてきた。

カツッ。

高いヒールの踵が地面に着いた音を合図に、蝙蝠達がサッと空へ散っていく。

「あ、あの……」

「ダメよ、こんな時間に出歩くなんて。悪い妖に……食べられてしまうわよ？」

囁く声に合わせ、薄く紅が塗られた唇から覗く鋭い牙。

実にわかりやすい特徴から導き出される答えは1つだ。

「きゅ……吸血鬼……ひっ、ひぃぃぃぃっ！」

思わず腰が抜け、その場にへたり込んでしまう。

「クスッ、いいわ……その悲鳴。そう……情けなく泣き喚き、憐れみを誘いなさい。それが捕食者である吸血鬼に魅入られた人間に許された、唯一の抵抗よ」

薄い胸の前で腕を組んだ吸血鬼少女がサディスティックに微笑む。

さっきは見とれてしまったけど、今は直視できないくらい恐ろしい。

（どうなってるんだよ、この街っ！）

魔法少女に犬耳少女、振り切ったと思ったら吸血鬼だ。

いくら俺がそういう体質だからって、あまりにも遭遇率が高すぎる。

今まで呪い殺されもせず生き延びてきた俺の悪運も、今宵限りか。

「ちょっと、なにをやってるのよ、エヴァ!!」

そしてダメ押しとばかりに、遅れていた魔法少女が追いついてきた。

逃げ場なし……完全に詰んだ。

「あら、相変わらず礼儀を知らないわね、夢宮さん。あなたが正体を見られた人間をむざむざ逃がそうとしているのを見て、こうして足止めしてあげていたのに」

「うっ……べ、別に頼んでないし、そんなこと！　と言うか、あんたの助けなんてなくても簡単に捕まえられたわよっ」

「ご自慢の魔法で？……クスッ」

吸血鬼が愉快そうに口元を緩めた。

「なっ……なにを鼻で笑ってるのよ！　ムカツク……と言うか、お子様がこんな時間に出歩くなんて非常識よ」

「忌まわしい太陽ではなく静かな月が支配する時間は、私達吸血鬼のものよ。そもそもあなたも私と同い年でしょう」

「あ～、そうだったわね。ごめんなさい、いつもつい忘れちゃうのよ。だって……同い年とは思えないくらい、可愛らしいサイズなんだもん」

魔法少女は嫌味たっぷりに言いながら、吸血鬼の頭をポンッと叩く。

完全に子供をあやすようなやり方に、余裕そうな吸血鬼の表情がビキッと強張った。

「ほ、本当に礼を知らない女ね」

「どっちがよ！　一々言葉遣いがえらそうなのはそっちでしょ」
まだ立ち上がれない俺を挟み、小気味よいテンポで会話をする魔法少女と吸血鬼。
もうすっかり俺のことなど目に入っていない様子だ。
逃げるチャンスなんだけど、情けないことにまだ足が震えていて力が入らない。
こうなったら這って逃げるか……？
「ほら、立てる？」
そう覚悟を決めたとき、不意に横から手が差し出された。
「あ、ありがとう……」
反射的に摑んで立ち上がり、その主を振り返る。
「あははっ、ごめんね～。なんだか怖がらせちゃってさ」
人懐っこい笑顔を向けてくるのは、俺と同じく蚊帳の外になっていた犬耳少女だ。
思わず仰け反って身構えたが、敵意はまるで感じない。
……この子には直接なにもしてないし、とりあえず大丈夫かな？
いや、油断は禁物だ。
とにかくこんな非常識な状況からは一秒でも早く抜け出したい。
「えっと……それじゃあ、俺はこれで……」
さりげなくフェードアウトしようと立ち去りかけた――が。
「ちょっとストップ！」

そう上手くいかず、犬耳少女に摑まれたままの手を引っ張られてしまう。
「痛くしないからじっとしてて」
「へっ、な、なにを……？　お、おいっ」
悪戯っぽくウィンクした犬耳少女が、軽く背伸びをして顔を近づけてくる。
反射的に身を竦ませた瞬間、首筋に鼻先が押しつけられた。
「クンクン……うん、やっぱりいい匂い！　凄いねぇ、キミ」
「に、匂い？」
別に香水やコロンはつけてないぞ。
全力疾走したばかりだから、せいぜい汗臭いだけだと思う。
「ふみゅ～、嗅いでるだけで身体がふにゃふにゃになりそー」
「い、いや、恥ずかしいんだけど」
「いいじゃん、いくらクンカクンカしても減るもんじゃないし」
目をとろ～んとさせて執拗に鼻を鳴らすその姿は、本物の犬みたいだ。
これ……立場が逆だったら、完全にセクハラだよな。
と言うか、すぐ目の前でゆらゆらしているポニーテールから漂う甘いシャンプーの香りのほうがよっぽどいい匂いだと思う。
特に珍しいものではないけど、可愛い女の子の髪から漂ってくるとやたらと魅力的に感じてしまうのは男の悲しい性だ。

おまけにいつの間にか腕にしっかりしがみつかれていて、二の腕が巨大な双球に見事挟み込まれてしまっていた。
（でっかいよなぁ、しかし）
さっき悲しい事故で掴んでしまったふくらみより、さらにふわふわとした柔らかさ。
腕がズブズブとどこまでも沈んでいきそうだけど、ある一定のところまでくるとグイッと優しく押し返される。
なんだか俺も目がとろ～んと蕩けてしまいそうなくらい心地よい。
「ん～っ、本当に凄い！　これだけ溜めてるなんて……」
「なにをだよ！」
身じろぎに合わせて腕を軽く擦られる形になっていたせいか、つい深読みして声を荒らげてしまった。
そ、そういう意味じゃないよな。他にパッと思いつかないけど。
「あははっ、お耳まで真っ赤だよ。はむっ」
「はふっ!?　ちょっ、おまっ！」
耳たぶを不意打ちで甘噛みされ、反射的に飛び上がってしまった。
「怖がらなくても、本気でガブガブはしないよ～」
「そういう問題じゃないだろっ！」
こ、この子……危険だ。小悪魔というか積極的というか……ある意味で、目の前の二人よ

りもはるかにヤバいぞ。
「ん～っ、本当に不思議な人だねぇ、キミ」
「いや、そっちの方がよっぽど……っていうか、あっちはいいのか？」
ニコニコ上機嫌な犬耳少女からペースを取り戻そうと、まだ言い合いを続けている二人の方へ視線を移す。
魔法少女と吸血鬼は俺たちのことなど忘れたように、興奮して声を上げている。
「と言うか、あんたも自分から正体晒すなんて不注意！　協定違反だわ」
「あら、私は自分の後始末くらいできるわ。どこかの脳筋さんと違って」
「誰が脳筋よ、誰が！　そうやって嫌味を付け加えないと会話もできないわけ!?」
俺が弄ばれていた間に、空気はますます殺伐としてきていた。
「礼が必要な相手には相応の態度を取るわ。でも……あなたにはねぇ」
「何がよ！　本当、口の悪いちびっ子ね、あんた」
「せ、背丈は今、関係ないでしょう!?　ふん、それくらいしか勝てるところがないからといって……憐れな女ね」
爪先立ちで見下ろす魔法少女を一瞥し、呆れ顔で天を仰ぐ吸血鬼。
余裕を見せているようだけど、コメカミがピクピクと震えていて怒りが丸わかりだ。
「他にいくらでもあるわよ。例えば～……スタイルとか？」
魔法少女もそれをお見通しなのか、煽るように胸元のふくらみを掴み上げる。

「なんなの、その勝ち誇った顔は！　そんな脂肪の塊の大きさが自慢になると？」
「はいはい、負け惜しみ、負け惜しみ。持たざる者ほどそう言うのよねぇ～」
「わ、私はまだ成長期なのよ！　くぅっ……できそこないの魔法少女風情が、限りなく真祖に近い血を持つこの私を愚弄するとは……」
「先に喧嘩を売ってきたのはあんたでしょ！　誰ができそこないよ」
グルルッと唸り声が聞こえてきそうな険しい顔で睨み合う二人。
内容は随分としょうもない気がするけど、かなりまずそうな雰囲気だ。
「相変わらず仲良しだねぇ、二人は」
俺にしがみついたままの犬耳少女は、まるで危機感もなくにこやかだ。
女の子としてはどうかと思うくらい大口を開け、あくびまでしている。
「と、止めなくていいのか？」
「ん～っ、大丈夫だよ、いつもあんな調子だし。心配してるの？」
「そりゃ……」
正体がどうであれ、見た目は可愛らしい女の子達だからな。
殺伐と喧嘩する姿を見たいとは思わない。
「ふぅ～ん。ふふっ……キミって、本当にいいねぇ。さっきからキキの好感度上げる選択肢ばっかり選んでくれちゃってるよー」
「はっ？　な、何がだよ」

女の子に面と向かってこんなこと言われるのは初めてだから、ドキドキしてしまった。
我ながらチョロいな、俺。
と言うか今の勿体ぶった言い回し、ちょっと同属の匂いがしたような……。
「キキは周りを大切にする優しい子、だ～い好きなんだよね♪」
「い、いや、そんなこと言ってないで、仲裁した方が……」
俺にしがみついたまま呑気にしている犬耳少女を促すが、もう遅かった。
魔法少女と吸血鬼の言い争いは残念ながらエスカレートしていた。
「ふぅ……口で言ってもわからない愚か者には、躾が必要かしら」
「化け物退治は魔法少女の務めだもん。あたしのフルスロットル……見せてあげる！」
さっきも聞いた決め台詞と共に、魔法少女がロッドを力任せに振り下ろす。
「相変わらず品のない攻撃……無駄よ」
刹那、漆黒のマントを翻した吸血鬼は高々と夜空へ舞い上がってそれを避ける。
そのまま月を背にして、指揮者みたいに両手の人差し指を振る。
軌跡に合わせて赤い亀裂が夜空に走り、そこからさっきいずこかへ消えた無数の蝙蝠達が姿を現わし、魔法少女へ一斉に襲い掛かった。
「こんな薄気味悪い連中を使ってるあんたに、品がどうこう言われたくないわっ！」
群がって一本の矢のように迫ってきた蝙蝠達に怯えることもなく、魔法少女はロッドをバットのように横振りして容易くなぎ払う。

そのまま力強く大地を蹴って舞い上がり、宙に浮かぶ吸血鬼へ襲い掛かった。
「きゃっ！　本当にどこまでも脳筋ね、あなた」
「最近の魔法少女は肉体言語も使うのよ」
落下するまでのわずかな時間に、軌道が追えない速さでロッドを振り回す魔法少女。
優雅に羽ばたきながらそれを紙一重で避ける吸血鬼。
魔法少女対吸血鬼というイメージとは違うけど、常識外れの凄まじい激戦だ。
「おーっ、相変わらず実力伯仲だねぇ。うん、リンリンのいい特訓になるよ」
まるで空気を読んでいないかのように満足げに頷く犬耳少女。
「いや、特訓で済むのか、これ？」
どう考えてもお互いに殺る気満々に見える。
元々俺が原因と言えなくもないし、これでどっちかが怪我をしたら後味が悪い。
「次こそ当てる！　うりゃああああっ!!」
「美しく華やかに散らせてあげるわ。クスッ……」
「ちょ……そこまでだ！　やりすぎだろ、これ以上は」
俺は名残惜しさを堪えつつ右手にしがみついたままの犬耳少女を振り払って、地上に降りて睨み合う二人の間へ飛び込んだ。
今にも飛びかかろうとしているそれぞれを制するように手を広げ――。
「え、あっ……」

「あぅっ……」
ふにっ……。そんな擬音がよく似合う感触が手の平に伝わってきた。
恐る恐る左右を確認すると、二人は仲良く茹だったように顔を赤くしている。
ちょうど一歩踏み出したそれぞれの胸へ、図ったかのように手が当たっていた。
……右手にはついさっきも堪能したお餅みたいな感触。
そして左手にもふわふわとマシュマロにも似た柔らかさが伝わってきている。
女の子の胸って小さくてもちゃんと柔らかいんだな。
それに見た目は平らだけど、ちゃんとふくらんでいるのが触るとよくわかる。
真ん中辺りに当たっているポチッとした硬い突起が、また柔らかさを一層際立たせていた。
西瓜に塩をかけると甘くなるって言うけど、あれと同じだな。あえて反対のものを一緒に味わったり感じたりすることでより良さが強調されるんだな。
と、二人の反応がないのをいいことに現実逃避を続けていた俺だったが――。
「おおっ！　キミって意外と大胆なんだねぇ～。もしかして、肉食系って奴？　匂い嗅がせてもらったお礼に、キキのも触らせてあげよっか？　大きいぞー！」
自分で双球を掴み揺さぶってからかう犬耳少女の声を合図に、時が動き出した。
「お、男に……触られて……初めて……きゅぅ～」
その動揺を訴えるように背中の羽根を激しくバタバタさせる吸血鬼は、糸が切れた人形みたいに崩れ落ちてしまった。

「あんた、ま、また、また……このっ、揉んで！　ギュッて……あぅぅっ」
パッと後ろに飛び退いた魔法少女はロッドを両手で持ち、ブンブン振り回している。
「違うんだ、い、今のは事故だ、事故っ！　俺は止めようとして……」
「それならさっさと離せばいいでしょ！　た、退治する……成敗確定!!　へ、変態駆除も魔法少女のお仕事なんだから！」
必死に謝るが、さすがに二度目の事故を快く許してくれるほどお人好しではないようだ。
逃げる間もなく、ハートロッドが俺の頭目掛けて振り下ろされる。
「天誅ーっ！」
「ちょ、やめっ……」
ガシッ。咄嗟に頭を庇って伸ばした両腕に、肘まで痺れる衝撃が伝わってくる。
ちゃんと力の加減はしてくれていたらしい。
……と言っても、脳天に直撃してたらたんこぶじゃ済まなかっただろうな。
――キンッ。
「……えっ、な、なによこれ？」
金属質な音と共に、魔法少女が戸惑いの声を漏らす。
俺が受け止めたロッドの先端から、眩い光が溢れ出してきたのだ。
変身した後、剣みたいに振り回していたときは何の変化もなかったのに。
今、どうして急に――？

「何よ、これ……まさか、魔法？　止まらない!?　嘘っ、ダ、ダメ！」
それを発動させているはずの魔法少女が、顔を強ばらせて悲鳴を上げる。
制御できないとか、そういうオチ？　そんな。
最悪の予感が脳裏を過った――直後、光が俺達を包み込むように弾けた。
バァァァァァァッ――ン。
「う、うわっ、あああああ！」
激しい爆風に、身体が紙くずみたいに吹き飛ばされる。
やばい、こんな……まさか、死……。
衝撃で意識が飛びそうになった刹那、柔らかな感触で身体が受け止められた。
「はふぅ、ギリギリセーフだったねぇ」
見上げると、さすがにちょっと焦った顔の犬耳少女と目が合った。
彼女のおかげで、どうにか最悪の事態は避けられたらしいが――。
「あ、ありが……と……」
「にひひっ、群れの仲間を守るのはキキの務めだから……って、大丈夫？」
頭上の三角耳を誇らしげにピンと立てる彼女へ礼を言う気力も、背中に惜しみなく押しつけられた巨乳を堪能する余裕もない。
俺は犬耳少女に背中を預けたまま崩れ落ち――。
ゴチンッ。頭を道に敷かれた煉瓦に打ち付け、大の字に倒れてしまった。

「ちょっと夢宮さん、確かに魔法を使えと挑発はしたけど、不意打ちは卑怯よ！　それとこの持ち方はなんなの？　高貴な夜の支配者を荷物みたいに……」
「助けてもらっておいて、贅沢言うな！　なんなのよ、今の。あたしもわからない」
すぐ傍らでは、魔法少女が小脇に抱えた吸血鬼と言い合いながら呆然としている。
失神していて逃げられなかった彼女を、ちゃんと助けてあげたらしい。
……なるほど、犬耳少女が言ったとおり、あえて仲裁しなくても大丈夫な仲だっていうのは本当だったか。
「多分、この子のせいじゃないかな～。クンクン……凄い匂いだもん！」
「に、匂いと魔法は関係ないでしょ！」
「待ちなさい、夢宮さん。犬飼さんが言う『匂い』ってもしかして……」
少し興奮気味に話す三人の声を聞いていると、意識が段々遠のいてきた。
（それにしても……魔法少女って、やっぱり少女趣味なんだな）
視線の先、魔法少女のスカートの中に見えるのは水玉模様の子供っぽいショーツ。
覗きじゃないぞ。寝てる男の顔の傍に立ってる方が悪いんだ。
それに、こんな強烈な魔法を喰らわされたんだ。
これくらい慰謝料として堪能させてもらっても、バチは当たらないさ。
そう心の中で毒づきながら――俺は意識を手放した。

1章▼『本物』のコスプレ部

「あっつぅ……」
思わず声に出しながら制服の上着を脱ぎ、ワイシャツの袖もまくりあげる。
すれ違う連中が物珍しそうに見てくるのも無理はない。
今日は一般的には少し肌寒い気温だからな。
（しょうがないだろ、暑がりなんだから）
小さい頃は真冬でも半袖半ズボンで外を走り回っていたくらいだ。
これだけ大勢で賑わっている廊下を厚着で歩くなんて、とても耐えられん。
「それにしても盛り上がってるよな」
新年度が始まった翌日、学校全体で部活勧誘のオリエンテーションが行われているのだが、これが俺の想像を上回る大規模なものだったのだ。
掲示板には勧誘のビラが隙間なく貼られ、校庭では野球部やサッカー部が紅白戦を、軽音部がゲリラライブを行っているのが窓から見える。
俺の転入先であるこの『公立風間東高校』は部活動に力を入れていて、生徒は必ずどこかに所属しなければいけないと担任の教師に聞かされた。

部活動に青春を燃やすというのも悪くないとは思う――けど。
（落ち着けないなぁ）
こうして廊下を歩いているときも、周囲を警戒せずにいられない。
この心霊都市への引っ越し初日の夜早々に味わった非現実的な出会いが、すっかりトラウマになってしまったのだ。
あの後、俺は家の前に倒れているところを捜しに出てきたお袋に叩き起こされた。
後頭部に大きなたんこぶができていて、転んで打ち所が悪くて気を失ったのだろうということで片付けられてしまったけど……違う。
（あれは夢じゃなかった。それに、同じ制服……だよな）
横目ですれ違う女子生徒の制服を確かめ、肩を震わせた。
魔法少女が変身する前に来ていた制服――それはこの学校の指定制服だったのだ。
つまり、あの魔法少女はここの生徒なんじゃないだろうか。
明らかに顔見知りだった犬耳少女や吸血鬼も当然その可能性が高い。
もしあいつらとまた出くわしたら。そう考えると気が気でなく、周りの様子をうかがいながら怯え暮らすしかなかった。
おかげでクラスでは『無口で取っつきの悪い転校生』というレッテルを貼られ、早々に楽しい青春を過ごすという目標に暗雲が漂い始めている始末だ。
（しかし、色々オカルト経験してきたけど……今回は一際凄かったな）

現実離れしたバトルを目の当たりにするわ、魔法っぽい爆発に巻き込まれるわ。
でも、嫌なことばかりではなかった。
抱き締められたときに漂ってきた女の子特有の甘い香りとか、何より生まれて初めて堪能してしまった、この世でもっとも魅力的なふくらみの感触。
それも、とびっきりの可愛い女の子達三人分だ。
ある意味、人生最大のインパクトと言ってもいい経験だったぞ、あれは。
大きいのも小さいのも柔らかくて、プニプニで……。
大きさと言えば、あのやたら人懐っこい犬耳の子……半端なかったよな。
腕がどこまでも沈んでいきそうな感触を思い返しながら、廊下の角を曲がろうとしたとき――。
「きゃんっ！」
わざとらしいくらいの悲鳴と共に、温かいものが胸板に衝突した。
俺もバランスを崩しかけ、慌てて立て直そうとしたが。
「うおおっ！」
床に落ちていたプリントで足を滑らせ、まるでコントみたいに大げさな動きで前のめりに倒れてしまった。
ぱさっと布地が頭に被さって視界が暗くなる。
息を吸うと、頭がクラクラしてしまうくらい濃厚な薔薇っぽい匂いが漂ってきた。

（俺、どうなって……？）

何が起こったかわからずに瞬きを繰り返していると、ようやく目が慣れてきたのか前が少しずつ見えるようになってきた。

こんもりと盛り上がった真ん中に黒い紐みたいな布地が食い込んでいる。

「ひっ……あ、あの……」

聞こえてくる上擦った声に合わせて、紐を噛み締めるように唇みたいな部分が蠢く。

そこへわずかに触れている鼻先が少し湿り気を帯びた温もりを感じる。

この頭にかかってるのって、スカート……？

だとすると、今、俺が見てしまっているものは――口に出すのをためらわれるくらい洒落にならないものではないだろうか。

「ご、ごめんっ！」

謝りながら慌てて立ち上がろうと手探りしていると、柔らかいものを掴んでしまった。

むにゅ～とどこまでも指が沈んでいき、とても全体を掴み切れない圧倒的なサイズ。ついさっきまで思い返していた感触を彷彿とさせる――いや、それよりもさらに一段大きくてふわふわしている。

「きゃっ、あ、ああ、あの！　ダメ、ここ、ひ、人が見て……はううううっ!!」

「うっ、うわあああっ！」

鼓膜が痛くなるくらいの大きな悲鳴で我に返り、改めて床に手を突いて跳ね起きる。

思い切り尻餅をついたまま見上げてきているのは、両サイドを十字架のピンで留めた髪型をしたスーツ姿の女性だった。

胸も脚もムチムチと肉づきがよく、大人の成熟した魅力がプンプン漂ってくる。

前を見ずに歩いていたせいで正面衝突、盛大に転んだ挙げ句にこの美しいお姉さんのスカートの中に頭を突っ込んでいた。

そんな大昔の少女漫画の上をいくトラブルを起こしてしまったようだ。

「だ、大丈夫ですか？」

気づかって声をかけるが、女性はおどおどした小動物みたいな目に涙を浮かべ、肩を小さく震わせているだけだった。

そのわずかな振動に合わせて揺れている胸元は、掴んだときに感じたとおり目を見張る圧巻の大きさだ。そりゃ、このサイズだと手で掴み切れないよな。

……って、浸ってる場合じゃないっ。

「あの、あのね、神喰くん！　こ、こういうのはいきなりはよくないと思うの。順序というものがあって、そそそ、それに場所とかも……ちがっ、わ、私、何を言って……」

「あ、あの落ち着いて。えっと……」

どうして俺の名前を知っているのかと疑問に感じたが、少しして気がついた。

そう言えば始業式のときに紹介されていたぞ、この人。

特別な事情でこの時期にやってきた教育実習生で、俺のクラスの授業を担当してくれると

かいう……一ノ瀬愛莉先生だ。
「ど、どうしよう。心の準備が……落ち着いて。まずは呼吸を……ひー、ひー、ふぅ」
「いや、その呼吸法はちょっと違うんじゃ」
と言うか、まずはスカートを直してくれないかな。
むっちりと熟れきったふとももの真ん中まで裾がめくれていて、今にも中が丸見えになってしまいそうだぞ。
「あの、とりあえず立ちませんか？」
引き起こしてあげようと手を伸ばす。
「きゃっ、あっ、あの！　私……ダメ、これ以上はダメぇぇっ!!」
一ノ瀬先生は跳ねるように勢いよく起き上がり、悲鳴だけを残して駆けていってしまった。
途中で他の生徒に何度もぶつかって、また転びそうになってる。
「……そこまで怖がらなくても」
でも、仕方ないか。事故とはいえ、ありえないセクハラしちゃったんだし。
（しかし……気弱そうなのに、下着は随分と大胆だったよな）
Tバックだったよな、あれ。人は見かけによらないって本当だ。
……ご馳走様でした。
心の中で手を合わせ、ヨタヨタと遠ざかっていく背中に感謝と謝罪をする。
「ねぇ、今の見た？」

「ちょっと……ありえないよね」
直後、聞こえてきたひそひそ話。今のやり取りを見ていた生徒達が、揃って俺を責めるように睨んできているのに気づいた。
「あいつ転校生だよな。いきなりあんな……」
「廊下で教育実習生を押し倒すとか、大胆にもほどがあるだろ」
おまけに、何だか話がどんどんふくらんでるぞ。
もう完全に痴漢扱いで、特に女子から向けられる視線は暑がりの俺が背筋を震わせてしまうくらいに冷たくなってきていた。
（じ、事故だぞ、今のは！）
このままだとあっという間に噂が学内に広がり、痴漢転校生というレッテルを貼られて卒業まで孤独な学校生活が確定だ。
そ、それは嫌だっ！　でも、どう説明すれば……。
「下がりなさい」
突如聞こえてきた舌足らずな甘い声に、まわりのざわめきがピタッと止まった。
俺を囲んでいた人混みの一部が左右に割れ、そこから――。
「ごきげんよう」
優雅に歩み出てきたのは、周りよりも頭一つ以上背が低い銀髪の少女。
制服姿だし、腰の後ろに特徴的な羽根はない。

でも、そのフランス人形みたいな美しさ。そして心の奥まで覗かれそうな瞳にははっきりと見覚えがあった。
（きゅ、吸血鬼……！）
もしかしたら同じ学校じゃないか。
そんな嫌な予感が見事、的中してしまったらしい。
「ふふっ……運命とは面白いものね」
絶句する俺を見上げながら、吸血鬼はクスッと小さくほくそ笑む。
人の生き血を啜る怖ろしい化け物だとわかっていても、その笑顔は見とれてしまうくらいの愛らしさだった。
ふと彼女の後ろを見ると、言葉もなく恍惚としている男子と女子が両手の指で足りないくらい並んでいる。
吸血鬼は血を吸った相手を下僕にするって言うよな。
込み上げる恐怖を生唾と一緒に飲み干し、今は唇に隠れている鋭い牙を思い浮べる。
俺もそうなるのか？　あの牙を首筋に突き立てられて――。
「見ていたわ。災難だったわね」
「えっ？」
「あの教育実習生もあなたも、もう少し前に注意して歩いた方がいいわ。そうしないと、こうして余計な勘違いをされてしまうから」

髪を優雅に掻き撫でた吸血鬼が、そう言って取り囲む周囲の連中を見渡す。
その瞳が一瞬だけ紅く輝いたように見えた。
「そう……よね。今のは事故だもの。悪くないわ」
「災難だったけど、でもちょっと羨ましいかもな。ははっ」
途端に俺を睨んできていた連中が揃って表情を和らげ、立ち去っていってしまった。
な、何が起こったんだ？
「つまらない勘違いで、せっかくの学校生活が台無しになってしまうのはあまりにも憐れだから。ちょっと手助けしてあげたわ」
戸惑う俺に悠然と微笑みかけてくる吸血鬼の瞳が、また一瞬紅く光った。
何か力を使ったのか？　人の心を操る催眠術みたいなものを。
「そんなに見つめられると照れるんだけど」
「えっ、うっ、ご、ごめん！」
「クスッ、私の美しさに惹かれるのは無理もないことだけれど。この子達みたいに」
立てた人差し指を唇に当て、悪戯っぽく小首を傾げる吸血鬼。
後ろに並んでいる付き添いの連中が、揃って大げさに頷く。
やっぱり、こいつらは下僕にされた被害者……。
「エヴァ様可愛いっ!!」
「エヴァ様は最高です！」

「あんっ、大人ぶるエヴァちゃんも凄くキュート♪」
と言うには、ちょっと軽い感じだな、おい。
「ふふっ、もっと褒めなさい。いくら言葉を並べても、私の美しさを語り尽くすことはできないでしょうけど」
自慢げに薄い胸を張る姿からは、あの夜のような怖ろしさを微塵も感じない。
普通のファンクラブっぽいノリだよ、これ。
……えっ、もしかして本当にそうだったり？
「あ～、あの……」
「礼は必要ないわ、神喰琉 聖」
「なっ、何で名前……」
「あのとき、あなたが生徒手帳をポケットに入れてくれていて助かったわ。そうでなければ置き去りにしなければいけなかったもの」
そうか。それであの夜、気付いたら家の前に……。
じゃあ、やっぱりあれは全部現実ってことかよ。
「自己紹介が遅れたわね、私はエヴァ……空詠・W・エヴァ。あなたと同じ2年生よ」
「……同じ？」
身長とスタイルだけ見ると中学……いや、小学生としか……。
「疑問があるなら聞くわよ？」

「な、何もありません！」
コメカミをヒクヒクさせる吸血鬼――エヴァに、俺は慌てて首を横に振って返す。
そう言えば、あの夜も魔法少女に身長のことでいじられて、すぐキレてたな。
間違いなく彼女の地雷らしい。……触れないようにしておこう。
「え～っと、空詠……さん？　その……」
何で俺の前に現れたのか。
まさかこんな廊下のど真ん中で血を吸うなんて、大胆な真似はしないよな。
「エヴァでいいわ。ふふっ、肩の力を抜きなさい」
そう言ってずっと唇に当てたままだった人差し指を離したエヴァは、それをそのまま――ピタリと俺の唇に優しく押しつけてきた。
絹みたいにしっとりした感触が吸いつく。
茹だるような熱が頬や頭にまでじわじわ伝わってきてのぼせそうだ。
「口が堅い男って嫌いじゃないわ。さっきのはそのご褒美よ」
エヴァは小首を傾げて囁きながら、指をゆっくりと俺の顎の方へ滑らせてきた。
そのまま首、喉仏、そして鎖骨の方まで撫でられる。
触れられたところがくすぐったく、胸がドキドキしてしまう。
「私の蝙蝠にあなたのことをしばらく監視させてもらっていたけど、ちゃんとこの街で暮らすあやかしのルールを理解しているようね」

「か、監視!?」
ちっとも気付かなかったぞ、そんなの。
口が堅いとか、ルールとか……要するに、この間のことを誰にも話していないことを褒めてくれているのだろうか。
あんなこと話したって信じてもらえるはずがないから、黙ってただけなんだけど。
「これからもいい子にしている限り、私はあなたの味方よ」
また指を俺の唇へ戻し、チョンと軽く突いてくるエヴァ。
というか……さっき自分の唇触ってたし、間接キスになるよな、これ。
それに気付くとますます頬が熱くなってしまう。
口の中に広がる甘いイチゴのような香りも強くなってきた。
「私はね、優雅に暮らしたいの。こうやって私の美を愛でるファンに囲まれて、平穏に学生生活を楽しむ……それ以外に望むものはないわ」
「あ、ああ。俺も……平穏な学生生活がいい」
「そう。なら、目的も同じ……協力できそうね」
完全にペースを握られているけど、それが少しも嫌ではない。
むしろ手玉に取られて嬉しいというか……そんなあやしい艶な魅力を漂わせている。
同い年だけど、お姉さまと呼びたくなるような……背は小さいけど。
「また失礼なことを考えなかった？」

「な、何も考えてないっ!!」
いきなり顎を乱暴に掴まれたけど、必死に否定する。
心を読んでるのか？　吸血鬼ならできそうだよな、それくらい。
と言うか、力、す、凄く強いぞ！
腕なんて俺の半分もないくらい細いのに、骨がミシミシ鳴ってる。
「とにかく、これからも余計なことを言わないように。それでは……ごきげんよう」
念を押して俺から離れたエヴァはスカートの裾を摘み上げて優雅にお辞儀をすると、付き添いの連中と共に立ち去っていった。
い、生き延びたのか……俺は。
遠ざかっていくエヴァは、付き添う女子生徒から桃色の紙パック――イチゴ牛乳らしきものを受け取り、ニコニコと上機嫌に飲み始めた。
まだ唇に残っている甘い匂いの正体はあれか。
それにしても……吸血鬼が飲むものにしては、随分と可愛らしい。
ちょっとイメージ変わったぞ。

「どうなるんだろうな、これから」
痴漢転校生呼ばわりされるのは回避できたが、同時に夢であって欲しかったトラブルが現実だと確定してしまった。

吸血鬼に監視されながらの学生生活なんて、気が休まる暇がない。
「やっぱり、一人でどこか違う街へ逃げようかな」
親の脛囓り虫な高校生には、吸血鬼退治と同じくらい実現不可能だけどさ。
「まあ……黙ってればいいんだよな」
そうすれば手出しをしないとエヴァは言外に約束してくれた。
吸血鬼の言うことが信じられるかどうかは別だけど……。
「うっし、部活だ、部活！」
頬を叩いて不安を振り払い、辺りを見渡す。
適当に歩いているうちに、校舎別棟の4階、文化系の部室が集まる場所にきていた。
スポーツが苦手ってわけではないが好きでもない。
ゲームやアニメ好きとしては、できればそれっぽい部がいい。
傍の掲示板に案内図があったので、それで確認してみる。
「文芸部に漫画研究部、パソコン部に……コスプレ同好会？」
わりとよそでもありがちな部が並ぶ中、物珍しい名前に惹かれる。
何をするんだ、コスプレ同好会って。
衣装を作って着るだけなのか？　それ以外思い浮かばないけど。
「ちょっと覗いてみるか」
オリエンテーション中は、自由に見学することができる決まりだ。

俺は早速『コスプレ同好会』の看板が出ている教室に向かった。

「すいませーん、ちょっと見させてもらっていいです……か……」

特に鍵もかかっていなかった扉を開けて中に踏み込む。

直後、俺の視界に飛び込んできたのはやたらとカラフルな光景だった。

中央に置かれたテーブルを挟んで立つ二人の女子生徒。

「えっ？」「うにゃ、お客さん？」

こちらを振り返るその顔には見覚えがある。

あの夜出会った魔法少女と犬耳少女に間違いない。

吸血鬼がこの学校にいたんだ。こいつらがいるだろうとは覚悟していた。

だが、こんな不意打ちで遭遇するなんて。

状況も洒落になっていない。

テーブルの上に片方はきちんと畳まれ、もう片方は乱雑に脱ぎ捨てられているのは学校指定の女子制服。ちょうど衣装に着替えている最中だったのだ。

「なっ、なな……えっ」

小さな唇をまん丸と広げて絶句するツインテールの魔法少女は、あの夜着ていたものとはまた別の、もっとヒラヒラとした魔法少女っぽい服を身につけていた。

まだ上着しか着ておらず、ニーソックスがよく似合う細い脚は丸出しの状態。

上着の裾からチラチラと縞模様の可愛らしいショーツも見え隠れしている。

「ありゃりゃ、鍵かけ忘れちゃってた。ごめん、ごめん！」

片や飄々と笑っている犬耳少女は、毛皮模様のビキニと肉球がお茶目なグローブを手足にはめている。

成長著しい胸の双球をビキニブラのカップに収めようと微調整していた最中らしく、上乳がほとんどこぼれた状態。底が見えない深い谷間に見とれてしまう。

……って、そんな場合じゃない。

「この痴漢、ヘンタイ、へんたぁぁぁぁぁぁぁぁい!!」

「ち、違うっ！　俺は……」

「言い訳するな、この色魔！　あ、ありえない、学校の中でこんな……浄化よ!!　その煩悩、あたしの光で浄化してやるーっ！」

魔法少女は手にしていたスカートを放り投げ、テーブルを飛び越えて詰め寄ってきた。

おかげで上着が大きく捲れ、相変わらず少女趣味なショーツが丸見えだぞ。

ふとももの付け根に布地の端が深々と食い込み、強調された三角地帯に視線が釘付けだ。

「俺は悪くない！　だって今日は部活動の見学は自由のはずだろ？」

「はっ、何を開き直ってるのよ！　ノックくらいするのが常識でしょ」

「落ち着きなよリンリン。この子の言うとおり、鍵をかけ忘れてたキキ達のミスだよ」

胸倉を摑まんばかりの勢いで詰め寄ってきた魔法少女を、スキップ交じりの軽い足取りで割り込んできた犬耳少女が制してくれる。

この前といい今といい、庇ってくれるのは感謝したいんだが……。
ぶるんぶるんっと揺れる胸の双球の重みでビキニがずれ、一気にこぼれ落ちてしまうんじゃないかと見ている俺が心配になる。
「うぅ、それはそうだけど！　でも、こいつは前科もあるし!!」
「にひひっ、そのときのことも含めて色々話をしようって言ってたよね？」
ちょっと待て、何だか雲行きが怪しいぞ。
「えっと、お、お邪魔しました……」
面倒はご免だと後ずさりする。
吸血鬼はどうにかやり過ごせたんだ、逃げ切って普通の学生生活を手に入れてやる。
「逃がさないわよ!!　ちょうどいいわ、落ち着いた頃にこっちから乗り込もうと思ってたの。あんたには聞きたいことがいっぱいあるんだから！」
「そうそう。つれないこと言わないで、ゆっくりしていってね♪」
そんな決意も虚しく、前後を固められて逃げ道を塞がれてしまった。
「今日はとことん付き合ってもらうから……覚悟しなさい」
両手で俺の襟元を掴んできた魔法少女が、厳しい口調で問い詰めてくる。
質問の意味がよく理解できないし、立ち位置的にちょうど胸の谷間が見えてしまう。
大きすぎず小さくもなく、ちょうどいいサイズだよな。
形も丸っこく整っていて綺麗だし。

「正直に言わない悪い子はキキがガブガブしちゃうぞ、がおーっ!!」
その衣装と耳に合わせた獣っ娘な演技をする犬耳少女は、俺の両脇に手を差し込んで羽交い締めにしてくる。
大きな双球が背中でグニグニと潰れているんだけど、気にする素振りもなかった。
浸っている場合じゃないとわかっていても、そのもっちりとした弾力に抗えない。
ダメだ。ここでニヤニヤしたらまた痴漢扱いされる。
「頼むから離せ！　せめて座って話をさせろ」
最悪の事態を避けるため、俺はそう言って折れるしかなかった。

最後まで立ち読みしてくれて
どうもありがとう！
続きは本で楽しんでね！

オーバーラップ文庫